

常濟大師の思想と行實

神 保 如 天

筆者云、本稿は或る他の目的を以て物した舊稿である。締切の期日迫り止むを得ず請はるゝまゝに此の稿を以て責を塞ぐ。乞寛容。

一、瑩山禪師の宗門に於ける位置

瑩山禪師、諱は紹瑾、瑩山は其の號、幼名を行生といふ。龜山天皇の文永五年戊辰（皇紀一九二八）十月八日（陽曆十一月廿一日）に誕生し、後醍醐天皇の正中二年乙丑（皇紀一九八五）八月十五日（陽曆九月廿九日）に示寂せられた、在世五十八年。鎌倉幕府でいへば北條時宗が執權職に就いた年から、北條高時が執權を去つた年までの期間にあたる。

瑩山禪師は曹洞宗大本山總持寺の開祖で、我が大日本帝國に初めて曹洞禪を傳へた永平道元禪師第四世の法孫である。釋尊は初祖摩訶迦葉尊者に正法眼藏を付屬し、それより嫡嗣相承して西天四七東土二三、道元禪師は其の第五十一傳、瑩山禪師は第五十四世の祖師である。故に我が宗にては永平道元禪師を高祖、瑩山紹瑾禪師を太祖と稱し、宗門にては之を兩祖といつて崇敬してゐる。又高祖開創の永平寺、太祖創業の總持寺、この兩寺を大本山とよび同列本山として一萬四千の末派寺院に君臨する、これは殆ど他に類例を見ない曹洞宗特殊の機構である。その瑩山禪師が、どうして太祖と尊敬せられ、總持寺が大本山の位置にあるかといふに、これは瑩山禪師其の人の世傳、閱歷、人格、思想、

德望、行持等々のすべてが此れを物語るものでなくてはならぬ。

瑩山禪師滅後二十九年、即ち正平八年十二月八日に後村上天皇は佛慈禪師の徽號を賜ふた。それより四百二十一年後、安永元年十一月廿九日、後桃園天皇勅して弘徳圓明國師の諡號を賜つた。又百三十七年後、明治四十二年九月八日、明治天皇特に常濟大師の勅諡號を賜つた。故に瑩山禪師を稱するに最高の師號たる常濟大師を以て敬稱すべきである。筆者はこれより後、單に大師と呼ぶは瑩山禪師即ち常濟大師のことである。

二。常濟大師の氏族と本生譚

大師の出生地は大師自からの記するところに據れば、「越前の國多禰觀音堂の敷地也」(傳通院緣起)とある、其の多禰とは郡か邑か郷か、古來種々の説がある。現に越前國坂井郡高椋村山崎三ヶ區の中に種といふ小字があり、以前は多禰郷と稱し村社を多禰神社といふ。恐らくは此の多禰郷ならんと思はるれど、此の地に觀音堂が現存してゐないばかりでなく、傳説もないといふから、果して此の地かどうかは判然しない。父母の姓氏に就いては、大師「曾て姓氏を説かず」(佛慈講式)とあるほどで、自から父母の姓氏を言はれたことがない。歸佛後に於ける父の名了閑上座、母の名懷觀(一本慧觀)大姉は能く人の知るところであるが、俗名は知る由もない。本朝高僧傳、洞上聯燈錄等はいづれも「越前多禰郡人也、姓藤氏」といひ、太祖略傳には「越前多禰邑豪族、藤原某の一子なり」といふ、或は藤原氏の末裔、豪族瓜生氏の子なりともいふ。眞偽知り難しと雖も、當時中流以上の家庭に生育せられたといふことは、其の人格風貌でも大凡察することが出来る。

大師は「自傳」に次のように記してゐられる。

予は昔、毘婆尸佛の時より羅漢果を證したところの、須彌山の北、雪山に止住する鳩婆羅樹神である。樹神乍ち果を證して今に至つた者である。第四の尊者蘇頻陀と共に北俱盧洲の雪山に住んでゐた、現在此に生れたのは北國に縁があつてそれで白山の氏子となつたのだ。(原漢文、取意)

と。大師は俗姓氏族に就いては一言半句も之をいはずして、佛法の上から久遠劫に於ける過去の因縁、本事本生を説かれたところに大師の自信と抱負とに特異性の存するを見なくてはならぬ。毘婆尸佛は過去七佛の最初の佛であり、鳩婆羅樹神は正法守護を誓願とする證果の羅漢である。過去深遠の昔から生々世々佛法護持を本誓とする者なることを示したところは、世間の謂ゆる源平藤橘の姓氏を争ふ凡俗輩と、全然比較にならない非凡脫俗の風格が偲ばれる。

三。觀音信仰と純眞なる母性愛

常濟大師自撰の「圓通院建立緣起」を閲ると、大師の生母懷觀大師に對する御孝情と、子の大師に對する母性愛の純眞さがはつきり知ることが出來て如何にも尊く感ぜられる。原文は漢文であるが、其の大體を意譯すれば次の通である。

この圓通院の本尊は、予が今生の悲母懷觀大姉が一生の間、頂戴奉勤して肌身を離さなかつた十一面觀世音菩薩である。此の觀音菩薩は予の悲母の十八歳の時、或る事情で其の母親(祖母明智大姉のこと)に別離して其の後行方が知れ

たかつた、七八年間といふもの涙の時を過した。終に堪えきれずして京都の清水寺に日參して母の所在を知らしめたまへと祈つた。六日目に路次で十一面觀音の頭を拾つた、そこで發願していふには、吾は母を尋ねて今清水寺に日參してゐる者、圖らずも觀音の頭を拾ふ、若し吾に因縁ある觀音ならんには忽ち慈悲を施して吾が母に遇はしめたまへ。然うすれば此の御頭に御身を作り繼いで一生頂戴の守り本尊と致しませうと。祖母の使が上洛して又頻に其の女を尋ね回つてゐた。其の次の日、清水寺に參詣の路次で此の使に邂逅し、直ちに母の所在を知つた。それで即時に佛師屋に往き御身を作り繼ぎ一生頂戴の守り本尊とせられた。それが圓通院の本尊、即ち此の十一面觀世音菩薩である。

然るに予の悲母三十七歳の時、朝日の光を呑むと夢みて予を懐胎した。それより悲母は守り本尊十一面觀音に祈誓して云く、吾今懷妊するところの子、聖人となり善知識となつて、世の爲め人の爲めに益する者ならば平安に産ましめたまへ、若し然らざる者ならば觀音の威神力を以て胎内にて朽ち失せしめたまへと。毎日一千三百三十三拜し、觀音普門品を讀誦すること九箇月、一日も休むことなし。産所に到らんとして安々と産る、故に生れて名を行生とつけた。

予が事としいへば、母は萬事萬端、此の觀音様に祈誓せられたものである。謂ゆる無難で成人するより、出家、修行、學文、發智、乃至嗣法、住持、利濟人天、皆悉く此の本尊に祈念せられた。剩へ予は若年の時、とても瞋恚の煩惱強く、前後を辨へぬようなこともやつた。悲母は之をひどく憂へて、此の僧、縦ひ利根聰敏智慧拔群であらうとも、斯かる瞋恚増盛の者では何の益にも立ちますまい、大慈大悲、菩薩の加被力を以て彼が瞋恚の猛火を消さしめたまへと、悲母は生命を賭けて觀音菩薩に縋つたこともある。予が十八歳の冬道心を發し、十九の秋發心して更に道を求め

た。叢林で早くも維那の役位を勤めた、一僧がひどく非難の罵聲をあびせたので、予は瞋恚増發、將に恐ろしい罪を犯さんとした刹那、郷里に祈る悲母の面がチラリと見えた、翻然悔悟して其れ以後腹を立てぬことにした。今日總持瑩山となり得たのは、これ一に予が悲母の祈念の力であつたのだ。

悲母は八十七歳で以て終焉せられた、其の時に唯一の遺物として予に此の觀音を與へられた。予は洞谷山（永光寺のこと）に主となつたから、此の中の一峰を分つて一院を建て圓通院と名ける。予の生髮と臍の緒とを、悲母一生隨身頂戴してゐた此の觀音に加へて當院の本尊とする。生髮と臍の緒とは觀音の臺座の右底に、白臘筒に入れて安いた。盡未來際に當山の鎮護とせよ、悲母弘誓度女の祈禱所とせよ、瑩山が弘法利生の祈禱所とせよ。

以上は其の概要である。悲母として子の爲めに祈らぬ親とはあるまい、されど大師の悲母の如く専心專念、祈りに祈つた悲母も亦蓋し少からうと思ふ。此の母にして此の子あり、大師の悲母を懷ふ孝情、實に念々切々、刀斧斫り難きものあり。母性の愛情と、愛兒の孝情と、全く渾一して大慈大悲の觀音薩埵となす。大師、大姉、觀音は實に三身一體にしていづれを聖、いづれを凡とも分ち難し。唯尊しといふの外はない。

四。大師一代の自傳と閱歷

主として大師の御自傳を據りどころとし、大師の略傳を敘べる。建治元年八歳にして永平寺に上り、徹通義介禪師を養母堂に訪ふて驅鳥となる、此の時介祖五十七歳であつた。弘安三年二月十八日、介祖の指示に依り永平先住孤雲懷辨禪師に大乘菩薩戒を受け僧となる。辨禪師は此の年八月廿四日示寂、故に「辨和尚末後の小師たり」とある。十

八歳にして發心求道、十九歳にして寶慶寺寂圓に參じ菩提心を發し不退轉位に至る。それより京師に入り東山湛照、白雲慧曉に參じ、比叡に上りて教觀の門を叩く。去つて紀州由良に法燈國師に禪要を聽く。遍參遊方前後四年。正應元年廿一歳永平寺に歸り介祖を省す。此の年加州野々市押野庄に大乘寺が勸建せられたので、介祖に隨つて山を下り大乘寺に入る。廿二歳聞聲悟道、廿五歳觀音薩埵の如く大悲闡提の弘誓願を發す。廿七歳永仁二年二月廿日、平常心是道の話に於いて大悟徹證、佛祖の心印を得て如來嫡傳第五十四世の祖位を承く。廿八歳阿波海部城滿寺（一本城萬寺に作る）に請せられて住持し、翌年、鐵鏡眼以下五人に初めて菩薩大戒を授く、三十一歳に至るまでに七十餘人を度す。正安元年三十二歳、介祖時に八十一歳、使を城滿寺に遣はし歸省を求めらる。それより大師は大乘寺に歸り止住して専ら本師の化を補佐す。翌正安二年の一月十二日より佛祖五十三位の正法輪を開演した、名けて「傳光錄」といふは即ち是れである。介祖八十四歳乾元元年に大乘寺を隱退し後を大師に讓る、時に三十五。嘉元二年十二月八日三十七歳、大乘寺に祝國開堂、以て寶祚の無窮を禱る。延慶二年九月十四日介祖九十一歳を以て遷化、大師四十二歳自から秉炬、喪主永安寺懷暉、首座鐵鏡眼可、監寺峨山紹碩、維那明峰素哲、懷觀大姉等ありて盛大殷懃の荼毘式を擧ぐ。應長元年四十四歳、先考了閑上座菩提の爲めに山崎村に淨住寺を創建し、悲母懷觀大姉を開基として之に居らしめ、可鐵鏡を西堂とし大師自から錫を留め母情を慰め且つ化を布かれてあつた。又能登羽昨郡德田、保に地頭得田章信の寄附により光孝寺を創し幽棲の地とせられた。正和二年四十六歳、海野三郎滋野信直夫妻の寄進に依り酒井保に洞谷山永光寺建立に著手、爾來七八年間其の伽藍造立に身心を投ぜらる。文保二年五十一歳の時、悲母懷觀大姉壽八十七を以て長逝せられた。翌元應二年八月信直夫人出家して祖忍尼といふ。元亨二年、勝蓮峰圓通院を建立し、悲

母念持佛の十一面觀音を本尊とし、默譜祖忍尼を院主なすこと、前章已に述べたところである。元亨元年四月廿三日と六月十五日との兩度の靈夢に感得し諸嶽寺を定賢律師の寄進に受け、諸嶽山總持寺と改め創業の地とせらる。同年八月、後醍醐天皇、三光國師孤峰覺明を勅使として十種の御下問あり、大師一一奏對、叡聞に達し御嘉納あらせらるるや九月十四日、總持寺なる勅額を賜はり、翌元亨二年八月廿八日に、總持寺を以て「曹洞出世の道場に補任する」といふ御綸旨を賜つた、これに依つて總持寺は一躍勅願所となり、曹洞宗の大本山たる位置に上つたのである。

元亨三年四月八日、洞谷山に五老峰を建造せられた、五老とは高祖天童如淨、會祖永平道元、祖翁永平二世孤雲懷辨、先師大乘開山徹通義介、洞谷開祖瑩山紹瑾を奉安して、親勤奉重の誠悃を傾くるところのものである。

元亨四年七月五十七歳、總持寺を退きて峨山をして之を續がしめ、大師は専ら永光寺に幽棲、翌正中二年八月、永光寺の塔守を明峰素哲に譲り、入寂の日近きを告げて八大人覺の提唱あり、十四日徹通介祖の月忌に當り扶育の鴻恩を謝し、十五日御親教、御遺偈を示させられ、巳刻御入寂になつた。遺偈に云く、

自耕自作、閑田地、幾度賣來買去新、無レ限靈苗種、熟レ脫、法堂上見レ插レ鋤人。（一本に起句の作を種に、轉句の種熟脫を繁茂處に、結句の鋤を鋤に作るあり。）

法嗣峨山紹碩は總持寺に、明峰素哲は永光寺に、無涯智洪は淨住寺に、壺庵至簡は光孝寺に、夫々化門を張らしめ、懷觀大姉追福の爲めに、尼寺寶應寺を建立し悲母の姪なる明照大姉をして香華を供せしむる等、後事一として遺漏あることなし。

其の著述を列擧すれば概ね次の如し。「瑩山和尚傳光錄」五卷、「瑩山和尚清規」二卷、「信心銘拈提」、「坐禪用心

記」、「三根坐禪說」、「祕密正法眼藏」、「十種疑滯(十種勅問)」、「洞谷記」等各一卷、其の他斷簡の記録等甚だ多し。

五。正傳の坐禪及其の宗風

大師の本師は大乗開山徹通義介禪師であり、師翁は永平二世孤雲懷辨禪師、曾祖は永平開山高祖道元禪師であることはいふまでもない。道元禪師には直接親炙する機會は得られなかつたが、懷辨禪師には「最後の小師」として菩薩大戒を受けられ、徹通禪師には三十五年親侍して正法眼藏を密傳密付せられた。懷辨、徹通の二師は共に道元禪師の爐鞴中に入つて一模に脱出した人であるから、徹通の面命は高祖道元禪師に面稟すると毫も異るところが無い。故に常濟大師の佛法は、道元禪師直傳親受の佛法と同一であらねばならぬ、道元禪師の正法眼藏は即ち瑩山禪師の正法眼藏であつて其の間一毫頭の隔りもない。傳光錄第五十一祖永平道元和尚章に云く、

尙ほ淨和尚を訪ひて一生の事を辨じ、本國にかへり正法を弘通す、實に是れ國の運なり、人の幸なり。恰も西天二十八祖達磨大師初めて唐土に入るが如し、これ唐土の初祖とす。師また是の如し、大宋國五十一祖なりといへども、今は日本の元祖なり、故に師は此の門下の初祖と稱したてまつる。抑も正師大宋にみち、宗風天下にあまねくとも、師若し眞師にあふて參徹せずんば、今日如何が祖師の正法眼藏を開明することあらん。

永平高祖を以て震旦初祖達磨大師に擬し、日本の元祖、門下の初祖と稱するは最大の尊敬にして、絶對の歸依を表明するものと云はなくてはならぬ。永平高祖の弘通する普勸坐禪儀、正法眼藏の宗旨を、傳光錄の隨處に之を見ることを得るが就中、其の最も之を縮圖したるは坐禪用心記一篇である。その首めに、

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ、是を本來の面目を露はすと名け、亦本地の風光を現はすと名く。身心俱に脱落し、坐臥同じく遠離す、故に不思議不思議、能く凡聖を超越し、迷悟の論量を透過し、生佛の邊際を離却す。故に萬事を休息し、及び諸縁を放下して一切不爲六根無作、這箇是れ誰ぞ。

といひ、又

坐禪は正に佛性海に入て即ち諸佛の體を標す、本有の妙淨明心頓に現前し、本來一段の光明終に圓照す。

といふ。更に

坐禪は教行證に于かるに非ず、此の三徳を兼ね。

と説き、次に

坐禪は戒定慧に于かるに非ず、此の三學を兼ね。謂く戒は是れ防非止惡、坐禪は舉體無二を觀ず、萬事を抛下し諸縁を休息して佛法世法管せず、道情世情雙べ忘す、是非無く善惡無し、何の防止か之れあらんや、此れは是れ心地無相戒なり。定は是れ無餘を觀想す、坐禪は身心を脱落し迷悟を捨離す、不變不動、不爲不昧、癡の如く兀の如く、山の如く海の如く、動靜の二相了然として不生、定にして定相無し、定相無きが故に大定と名く。慧は是れ簡擇覺了、坐禪は所知自から滅し心識永く忘す。通身慧眼、簡覺あること無し。明らかに佛性を見、本より迷惑せず。意根を坐斷し廓然瑩徹、是れ慧にして慧相無し、慧相なきが故に大慧と名く。諸佛教門一代の所説、戒定慧中に總收せずといふこと無し。今坐禪は戒として持たざる無く、定として修せざる無く、慧として通ぜざる無し。降魔成道轉輪涅槃、皆此の力に依る、神通妙用、放光說法、盡く打坐在在り。

と、高祖大師の祇管打坐の佛法を祖述して、坐禪を會する佛地に等しく、坐禪を説くこと妙處を極む。殆ど永平高祖の未だ説不盡のところを説盡すること、恰も能く靴を脱して痒處を搔在するに似たりといつてよからう。

大乘徹通禪師曾て大師に付授して云く、「汝、師に越ゆるの氣概あり、宜しく永平の宗旨を興すべし」と。古人の語に、「見、師に齊しふして師の半徳を減ず、見、師に過ぎて正に傳授するに堪えたり」と、大師は氣概師に越ゆるの力量ありて、正に徹通の佛法のみならず、永平の正法眼藏を振作興業するに堪ゆる大人物となつたのである。宗門後世永平高祖と並べ稱して太祖大師と尊崇する決して偶然の事柄ではない、高祖太祖の兩祖に據つて我が宗門の基礎は愈々盤石の固きを致したのである。

六。山居を排斥し伽藍を經營す

大師には從來の高僧碩徳とは餘程趣きを異にする所がある。大師の性格は極めて明るく朗かで、屈宅するところの無い、のんびりした心の持主であつたように思はれる。悲觀的で厭世的の氣分は少しも有つてゐられなかつたやうである。それが大師の家風として、一生の行實の上に如實にあらはれてゐる。先づ第一に擧ぐべきことは、山林に隱居することを極力排斥せられた。傳光錄龍樹尊者章に、

昔の比丘の如く、寂靜をねがひ、山林に隱居することなかれ。

と誠め、又

猶諸人と肩をまじへ、參來參去すること、閑靜ならざる故に、獨り山林に居して、靜かに坐禪行道せんと、かくの

如くいひて多く山谷に隱居し、みだりに修練する類、多くはもて邪路に趣き來る、ゆるいかなとなれば、其の眞實を知らず、自己を先とするゆるなり。

と斥けられてある。更に又

徒に參すべきを參ぜず、至るべきに至らず、山谷に居して獼猴の如くならん、もつともこれ無道心の甚しきなり。といひて、山林獨居の無道心なるを痛撃し、最後に

獨住閑居を好樂せず、たゞ道業を精進し、専ら法源を透脱すべし、是れまさに如來の眞口訣なり。

と結ばれてある。これに由つて觀れば大師は只管獨住閑居を排し、叢林修道を勸奨せられたことが知られる。これらの意味が坐禪用心記の上に明らかにあらはれてゐる。第一には伽藍の修築に大なる關心を有たれたことである。即ち殿堂伽藍の建立に大なる努力を拂はれたのである。その事實は永光寺、總持寺の大伽藍を經營せられた文書、史實に依つて明らかであるが、今は一一此に擧げるところを略しておく。何故に殿堂伽藍を欲せられたかといふに、それは一は傳道弘教の爲めに、一は行法儀式の爲めに、必らず大道場を要したからである。第三には自から名利に恬淡としてはおいでになつたが、名も利も施す者あらば敢へて之を拒否せられなかつた、殊更に名聞を求められるようなことは決して無かつたけれども、又強いて之を拒否するような態度は毫もなかつた。永光寺然り、總持寺然り、奏對然り、繪旨然り、勅額然り、施すものは之を受け、與へられるものは頂戴するといふ主義であつたらしい。而して其れ等には置文あり龜鑑を遺して「予が嗣法の門人、連續して住持興行すべし」と定めてある。鎌倉末期、後醍醐天皇の建武中興の大業を成させたまふといふ此の當時に於いて、斯る思想を有つ高僧があつたといふことは頗る異數であつたに相違

ない。若し時勢が許したであらうならば、大師は京都の中央に大伽藍を建立し、勅願所として紫衣法服を着けて上皇室に奉じ、下萬民を齊しく教化せられたことであらうと思ふ。能登の總持寺が六百年後、明治年間に至つて帝都に近く、鶴見に大本山總持寺を移轉し、輪奐宏莊の大伽藍を修築したといふことは強ち偶然の出來事では無かつたのである。

七。皇室、父母に對する報恩的精神

大師に就いて特に深く感ぜられることは、感謝の念の極めて篤いことである。大師の一生は全く恩寵の生活、恩義に酬ゆる精神を以つて一貫してゐたかのやうに思はれる。傳光錄羅睺羅尊者章に、

汝諸人、悉く皆國土にはらまる。一天下、國土上、悉く是れ國王の水土にあらずといふことなし。然るに家にあれば親に仕へ國に侍れば君に仕ふまつる、如是なる時、天地加護ありて自から陰陽の恵みをうく。而も愁ひに佛法をねがはんと號して、仕ふべき親にも仕へず、仕ふまつるべき君にも仕ふまつらず、何をもてか父母生成の恩を報じ、何をもてか國王水土の恩に報ぜんや。道に入りて道眼なからん、恰かも國賊といひつべし。

と。出家したる者が往々にして、家をすて國を棄てたる身なれば父母や國王の恩を報ずるに及ばぬものゝ如く思惟する邪見の輩を誡しめられたのである、斯る輩は道に入りて道眼無きが故に國賊なりと罵倒せられたのである。これに由りて大師が如何に國恩を感じ、父母の恩に報ぜられたかを事實について之を見よう。

總持寺十箇條之龜鏡の第一に「當寺は 皇情に依つて勅願所と爲る、故に予が嗣法の門人、盡未來際當山を以て本

寺と爲し、輪次の住持を勤め寶祚長久を祈り奉るべき事」と定められてある。瑩山和尚清規に年中行事の正月三朝の疏に、

今三朝の佳節に遇ふて恭しく聖壽を祝延し奉る、三箇日の際現前の大衆を率ゐ、覺皇寶殿最勝殿上に就いて、當途王經三卷を諷誦す、集むる所の鴻福は日本開闢天照大神、天神七代、地神五代、人皇九十六代、今上皇帝本命元辰……に祝獻す云々。

とありて、特に之に注意を加へて「祝聖は天下叢林の一大事也、一衆必ず出仕すべし、若し出仕なきが如きは維那は行者を以て催し集むべし」とある。朔望祝聖、聖壽牌安置、念誦等々、苟くも儀式法要あれば、皇圖の鞏固、國土の安寧を祈禱せざることを無しであつた。

次に父母の恩に感謝せられた事例であるが是れは極めて顯著である。前にも述べたやうに嚴父の姓氏は判明しないが得道の後は了閑上座と稱せられてある。「山僧遺跡寺置文記」に、

加州淨住寺は了閑上座の爲めに修練勤行せしむ。是の本願並に開闢は懷觀大姉並に紹瑾なり、加州第二の遺跡也。

とある。淨住寺は父了閑上座の爲めに、懷觀大姉と紹瑾、即ち母子兩人が本願主となり、開闢となつて、無涯智洪門徒をして相承し住持興行せしめられたのである。悲母懷觀大姉は文保二年八十七歳を以て永眠せられたから、大師は五十一歳で永光寺開創に已に著手せられた後のことである。故に大師は母の晩年淨住寺以後も親しく給仕せられたことであらうと思ふ。前の「圓通院緣起」の項で述べたやうに、大師懷孕の時から出生、成長、出家以後、子の爲めに祈りに祈つて如何にも母性愛の眞剣さがあらはれてゐた。大師も亦此の熱烈な母性愛の懷ろに抱かれて御生長になつ

たのであるから、母に對する孝養親情といふものは一入深かつた。大師が豊かな温かい明るい性情を有せられたのは此の母の愛の懷ろに常に育てられた賜ものでは無からうかと思ふのである。置文記に、

加州寶應寺は瑩山今生の悲母懷觀大姉の爲めに建立する所の尼寺也。明照姉公は彼が姪たるに依つて最初の房主に補す。乃至、明照以下門徒比丘尼中住持興行すべし。

とある。淨住寺、寶應寺の兩刹建立は大師孝情の至極として具現せられたものである。兩親ばかりでなく祖母の爲めにも一院を設けられた。同じく「置文」に、

山中圓通院は瑩山今生の祖母、明智優婆夷の爲めに建立する所也、幼穉養育の恩深きに依り一院を立て觀音を安じ、本願主本檀那祖忍大姉、永年偃息行道の道場處と爲す云々。

と、此の圓通院とは前に既に縁起を述べたところのもので、「當山に一峰を分ち勝蓮峰と名け、一院を建立して圓通院と號す」といつてある。祖忍尼は永光寺の大檀那で海野三郎滋野信直氏の夫人、元應元年八月六日剃髮して比丘尼となり默譜祖忍尼といふ。大師云く、

抑も彼は平氏の女(祖忍)は、永平和尙建仁寺に御座す時の御弟子明智優婆夷の再來なり、予と女とは磁鐵の如く相離れざる師檀師弟なり。

と、明智優婆夷は曾て永平高祖が建仁寺においでの際の俗弟子で、大師が幼少の時養育の深恩ある今生の祖母である。大檀那の祖忍尼は此の祖母の再來でもあらうか、磁鐵の如く相引くといふその祖忍尼が、清水寺に曾て母戀しと日參した悲母が、首を拾ひて其の身を繼いだ十一面觀音を安置する圓通院の院主と爲る。此の因縁の奇しきことは巧みな

る作家の小説よりも尙ほ奇しきことと思ふ。兎に角大師が祖母の恩誼を思ひ斯くも孝情を盡されるといふ此の態度は他の禪僧には恐らく多く類例を見ないところであらう。

八。檀越、師友に對する感謝的生活

次に注目すべきことは、檀越信施に對する感謝の念の極めて熾烈であつたことである。誰しも信施に對しては相當強き感謝の念を有つには相違ないが、其れを永久に子孫にまで之を傳へて檀越を供養せしむる點に於いては大師以外に例を求めることは出来ないやうに思ふ。總持寺は元眞言の律院で諸嶽寺といつたのを院主定賢律師が靈夢を感じ大師の高徳を慕うて、擧げて之を寄附したところの大檀越である、故に「十箇條龜鏡」の第三に、

當寺は元是れ敎院たりと雖も、定賢律師の請に依つて敎を革め禪と爲す、故に定賢律師を以て開基と爲し、香華を獻すべき事。

と定められて永世供養を掟てしてある。永光寺は海野三郎滋野信直（受戒して妙淨）、夫人（受戒して祖忍尼）の信施に基く、故に祖母明智大姉の爲めに圓通院を建立し「本願主、本檀那祖忍大姉、永年偃息行道の道場處」として最初の院主と爲し、「是れ則ち當山の大神所也」といへるもの、如何に感恩の念の切なるものがあつたかを知ることが出来る。「當山（永光寺）盡未來際置文」に云く、

佛言く、篤信の檀那之を得る時、佛法斷絶せず云々、又云く檀那を敬ふこと佛の如くすべし、戒定慧解、皆檀那の力に依つて成就す云々。然る間、瑩山今生の佛法修行、此の檀那の信心に依つて成就す、故に盡未來際、此の本願

主の子々孫々を以て當山の檀越大恩所と爲すべし。是の故に師檀和合して親しく水魚の昵りを作し、來際一如、骨肉の思を致すべし。

と、これに依つて能く其の心事を證し得るでは無いか。苟くも信施に衣食する僧徒には此の心懸けがなくてはならぬ。宜しく大師の心事に倣ふべきである。

最後に祖師に對して慈恩に酬答する觀念も亦特に旺盛であつたことを擧げ度い。永光寺に

自身の嗣書、先師の嗣書、師翁の血脉、曾祖の靈骨、高祖の語録を當山の奥頭に安置し、此の峰を名けて五老峰と稱す。然れば當山の住持は五老の塔主也

とあるは天童如淨—永平道元—孤雲懷奘—徹通義介—瑩山紹瑾の傳燈の最も親しき四祖を勸請し自身の嗣書を加へて祖々密々正傳の法を尊び師恩に報答せんとしたものである。殊に洞谷山永光寺の由來を説いて、

予は洞山高祖十六世の法孫たり、故に彼の家風を慕ふて山を名けて洞谷と爲す、山を改めて谷と爲すは曹溪を轉じて曹山と爲すが如し。大陽高祖十一代の法孫たり、故に大陽の盈目を慕ふて永光寺と號す。

と、洞山悟本大師良价禪師は唐代洞上の玄風を振へる高祖にして大師は其の第十六世、其の正統大陽警玄禪師は十一代の高祖であるからして、洞谷山永光寺と號したのである、此の兩高祖を擧げて嫡傳祖師の列祖に報ずるの一端とせられたものと考ふることが出来る。

更に一つ特筆すべきことがある。それは由良の法燈國師の弟子である恭翁運良和尚を請して大乘寺の住持たらしめたことである。大師は十八歳より諸國に遊方して幾多の知識に參尋せられた、其の間に紀州由良の興國寺に遊び、法燈

國師心地覺心に參ぜられたことがある。法燈國師は初め（仁治三年）深草に道元禪師を訪ね大乘菩薩戒を受け、後に宋に遊び楊岐下八世無門慧開（無門關の著者）に法を嗣いで歸り、由良に禪法を舉揚してゐたのである。其の門下に三光國師孤峰覺明、恭翁運良等があつて、大師と同學同參であつた。孤峰覺明は初め（洞谷山にて）大師に菩薩戒を受け法燈國師に嗣ぎ、出雲宇賀に雲樹寺を創して開山となる。元亨二年勅使として總持寺に十種の勅問を捧持したのは此の三光國師である。斯うした種々の深い關係があつて、大乘寺に恭翁運良を請し一代に限り之を住持せしめられたのは、一は法燈國師に對する報恩と、一は同參に對する友情の然らしむるところであらう。其の當時大師の門下に人が無かつたのではない、明峰素哲あり峨山紹碩あり鐵鏡眼可もあつた、それを特に運良を請したところに如何にも大師の人情味に豊かなる美點を認むることが出来る。

九。門下に對する深甚の慈念

大師は上祖師に對して報恩の念が深かつたばかりでなく、下門人子孫に對しても極めて慈育の愛情が厚かつた、寧ろ深い尊敬の念をさへ有つて居られたように見える。元亨元年正月廿八日鐵鏡眼可が遷化した、この事を記して、可鐵鏡遷化す、予が最初五人、得戒の上足なり、釋尊在世の陳如尊者の如し。城萬寺最初の首座也、先師圓寂の時初めて首座に任ず。加州淨住寺の西堂也。仍ほ當山（永光寺）に於いて半座を分つ、當山盡未來際敬重すべき首座也。

と。此の語を聞いては逝ける可鐵鏡が地下に瞑するばかりでなく、其の輪下に在る者も亦大師の爲めに粉骨碎身を惜

しまざるの感激を有つたであらう。元亨四年七月七日總持寺を讓與するに峨山紹碩を請する狀、正中二年仲秋八日永光寺を明峰素哲に讓與するの御狀等、一一此に掲げないが、其の文の叮嚀なること、其の意の懇切なること、實に讀む者をして襟を正さしむると共に、羨しいほどの人情美を發揮されてゐる。明峰素哲、峨山紹碩、無涯智洪、壺庵至簡の四哲の下、明峰下三十六門人、峨山下二十八員を出だし、やがて門葉天下に充ち、終に一萬四千の寺院を成すに至つたのは、蓋し其の流れ長きは源の深きに由る、大師包容無限の徳が後世に混々として盡きざるものあることを知らなくてはならぬ。

一〇。生々世々大悲弘誓の願

大師の自傳に

廿五歳にして觀音の如く、大悲闡提の弘誓願を發す。

といひ、正中二年五月廿三日（示寂の三月前）に兩願を發して云く、

一願は身命を顧みず、生々世々に菩提心を護持せん。一願は三世十方の一切の女流を濟度し盡さん。

と。此の再度の弘誓願は一に母性の感化と觀音信仰の半面とがあらはれたものではないかと思ふ。これも他の禪僧には一寸見ることの出来ない師の特有性ではあるまいか。

吾人は禪僧といふタイプに一の固定した概念を有つ。その概念で常濟大師を見ると何だかスツカリ變つてゐるよう
に思ふ。然し大師の禪僧タイプが本當の禪僧なのでは有るまいか、斯うした禪僧の出現を現代に於いて特に之を待望

度しい。大師の禪旨を知るには「傳光錄」や「信心銘拈提」、「坐禪用心記」等をよく讀破すれば解る。今筆者は餘り世に知られてゐない、大師の半面を力説することに特に意を用ゐたのである。(終)